

[シンポジウム記録]

2014年日本スラヴ学研究会シンポジウム 「いま読みたい中東欧の現代文学」【要旨】

小椋 彩

日本スラヴ学研究会 2014 年度年次シンポジウムが、6月14日、専修大学（東京都千代田区）にて開催された。シンポジウムのコンセプトは、「中東欧現代文学の魅力語る」。例年、6月のシンポでは、国内外からゲストスピーカーを招いて学術的な講演や専門的な研究発表を聞く場とすることが多かったのだが、今回は、少々趣が異なる。本研究会の活動を会員以外にもひろく知ってもらうことを目的とし、会員が研究対象とする中東欧文学を自ら「宣伝」しようということになった。邦訳で読める（もしくは近い将来邦訳される予定の）中東欧の現代文学の読みどころを、中東欧の言語や文学になじみのない方々にもわかりやすくレクチャーし、中東欧地域を知る縁としてもらおう、中東欧文学に親しんでもらおう、ひいては本研究会の会員になってもらおう、という企画だ。

報告者は登壇順に以下七名（敬称略）。原田義也（明治大学）、小林久子（東京大学院）、栃井裕美（日本学術振興会特別研究員）、櫻井映子（東京外国語大学）、小椋彩（東京大学）、木村英明（世界史研究所）、阿部賢一（立教大学）。また、コメンテータは沼野充義（東京大学）、司会は越野剛（北海道大学）。

本研究会企画編集委員・論集編集委員長の石川達夫氏（専修大学）による開会の辞につき、まずウクライナ文学研究者・原田氏の報告が行われた。「現代のマドンナは何を祈るか—詩人リーナ・コステンコの世界観」と題し、1930年生まれで現在もウクライナ文壇の中心で健筆を振るうリーナ・コステンコについて、その現代文学全体における立ち位置を、作品や、近年の講演やインタビューのなかに読み解いた。

アルバニア文学研究者・小林氏は、「イスマイル・カダレ『死者の軍隊の将軍』と『夢宮殿』における土着性と寓意」と題し、アルバニア文学を代表する作家で、近年はノーベル文学賞候補としても噂されるカダレの作品から、『死者の軍隊の将軍』（1963）と『夢宮殿』（1981）を取り上げ、作品におけるアルバニアの土着性と、社会主義体制下における政治的テーマの扱い方を、映画化の映像もまじえてレクチャーし

た。

セルビア文学研究者の梶井氏は「セルビアのユダヤ系作家ダヴィド・アルバハリ」で、ユーゴスラヴィアの文壇に70年代に登場、ナボコフやピンチョンの翻訳家でありながら作家となりポストモダン時代の旗手として活躍したアルバハリを紹介。現在はカナダでセルビア語での創作を続ける特異なユダヤ系作家の人生や作品を概説、今後の邦訳にも意欲を見せた。

リトアニア語・文化研究を行う櫻井氏は「パリース・スルオガ『神々の森—強制収容所を舞台にした悲喜劇—」にて、現代リトアニア文学を代表する作家スルオガの自伝的小説を、作家の実人生と20世紀前半のリトアニアをめぐる時代背景を踏まえ、映画化の映像もまじえて紹介。スルオガもごく近い将来、邦訳が予定されている。

ロシアとポーランドの文化・文学を専門とする小椋は、体制転換後の新しい文学の旗手として登場し、いまや現代ポーランド文学の中核として国内外でもっとも読まれている作家のひとり、オルガ・トカルチュクを取り上げた。2013年に初来日を果たし、来日講演も好評だった作家の邦訳二作品『昼の家、夜の家』、『逃亡派』を、それぞれ「キノコ文学」「移動の文学」などのキーワードとともに紹介した。

以上の五名がそれぞれ地域を代表する「読まれるべき」作家ひとりに焦点を絞ったのに対し、チェコとスロヴァキアの文学について、以下の二名は、注目すべき作家を複数取り上げ、地域的な特殊性をあぶりだした。

スロヴァキア文学研究者・木村氏の報告は「スロヴァキア語で表す〈いま・世界〉」と題し、「共同体の崩壊、民族間の軋轢、歴史と記憶、暴力、性、越境」といった世界の現代文学が共有するテーマが、とくにスロヴァキア語で書かれる意味について、「正史」の見直しという観点から解き明かした。ペテル・ピシチャネク、サムコ・ターレといった邦訳のある注目作家が取り上げられたほか、パヴェル・ヴィリコウスキーも木村氏による邦訳が期待される。

チェコ文学の紹介・翻訳について、現在本邦でもっともアクティブな活動を展開し、中欧文化論・比較文学を専門とする阿部氏は、十人の現代チェコ作家を「都市・記憶・移動」のキーワードを通して紹介。昨今の海外文学翻訳ブームを牽引する一人として氏の一層の活躍を予感させるとともに、世界文学のなかでも前衛を走るチェコ文学の位置づけが明確なものとして印象づけられた。

これら七名の報告に続き、本研究会元事務局長で中東欧文学全般に造詣が深い沼野充義氏より各国文学事情や各作家に関するコメント、その後、フロアもまじえての活発な質疑応答とディスカッションが行われた。最後は、本研究会企画編集委員長の佐藤昭裕氏（京都大学）による閉会の辞で、無事、閉会した。

日本スラヴ学研究会は、ロシアも含むスラヴ諸国・旧ソ連地域の文化や芸術を研

究する多彩な会員の集まりであることを自負する。一方、今回扱われたような広範な地域の文学について、専門家が一堂に会し語る場は、研究会の内でも外でも、これまでに設けられてこなかった。したがって、本シンポは、文化的な類縁性と多様性が共存する中東欧という地域の魅力を、まず会員自身が再認識するよい機会となったと思う。そして幸い、事前の宣伝活動も功を奏して、研究会外部からも多くの来場者があった。とくに近辺の大学から学生の聴衆を集めることができたことは大きい。できるだけ多くの国・地域を取り上げようとしたあまり、全体の時間が押してしまい、議論が深められなかったという反省はあるものの、研究者のみならずよりひろい聴衆に訴える、という企画当初の目的は達成されたと思われるし、シンポ後のアンケートからも、一般読者を対象とした企画自体の需要がじゅうぶんあることがわかった。今後、こうした企画を通じて、潜在的読者の掘り起しや、研究会会員につなげることが課題となるだろう。

なお、会場では、出版社（松籟社、白水社、東宣出版）による書籍販売も行われ、作品と翻訳者と出版社と読者のよい出会いの一日となった。休日にもかかわらず快く企画に参加してくださった編集者の方々、そして来場してくださった聴衆の皆様に、心よりお礼申し上げたい。